谷戸喜三郎追跡その後：
海国異人の肖像と足跡（承前）

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2021-11-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 歌野, 博
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4595

谷戸喜三郎追跡その後

――海国異人の肖像と足跡（承前）

歌野　博

Ⅰ　はじめに

谷戸喜三郎の名を知る人は少ない。幕末の一時期、上海や香港を拠点に国事に奔走していたと思われる形跡がある。すれば、幕末維新史上、もう少し知られるに値する人物と思うのだが、影を潜めている。

幕府方、倒幕派いずれの陣営にせよ、上層指導層にあったわけでもないのは確かだし、双方が対峙する主要な局面に立ち会ったこともなければ、時代を響導する思想を唱えもしなかったし、一編の著作すら残っていない事実は歴然としている。

人名辞典はもとより、郷土の人物辞典、幕末維新に限った人名辞典、特定の人物史、人物文献などことごとく見回しても、谷戸喜三郎の名を録するのは、唯一、『国際人事典　―幕末・維新―』（宮地正人監修、毎日コミュニケーションズ、1991）のみである。

要するにほとんど無名の人物にすぎない。各種人名辞典の編者たちの目に留まらなかったのも宜なるかな。贔屓目や思い入れのたぐいは歴史を見る目を曇らせるというものだ。

それでも、否、それだからこそというべきか、気になる存在である。気になる、というのは、歴史への視線をほんの少し転じてみれば、かかる、まったき黙殺は歴史が自らを不当に貶めるものではないか、という口惜しさに似る。歴史への転じられた視線は、海国異人の行動と思想を目撃し、その存在自体、またその評価に関する検証作業に駆り立てることになる。

前稿より荏苒十年余、その間に拾い上げたささやかな事実を記し、続稿としたい。前稿では、谷戸喜三郎を「海国異人」の一人として扱った。「海国異人」とは、「幕末開国期に異国へ出奔した日本人」のことである。詳細は前稿に譲るが、谷戸喜三郎という無名の人物に心曳かれた一端の動機が「海国異人」なる呼称にある。

「海国異人」とは奇妙に想像力を刺激する言葉である。

その資料的裏付けに基づく規定はひとまず留保しておく他ないが、刺激されるままの想像を恣にすれば、異国放浪、回国無頼、外国かぶれ、外国ゴロ、精神的な無国籍者、亡命者、国籍離脱者、密航者、国際間諜等々、やくざな言葉たちが我先にと浮かんでくる。

「蘭癖家」という言葉もある。江戸時代、蘭学に旺盛な興味を示した者に与えられた呼び名で、福知山藩の朽木氏など蘭癖家の大名として知られた。「癖」には、理性の統御をものともせず対象にのめり込んでやまない、一種狂的な情念を感じさせるところがある。

飛躍するが、今日でも留学その他の目的で外国に渡りながら、そのまま現地に不法に居着き、ガイドや通訳のアルバイトで食いつないでいる若者がパリやロンドンにかなりいて、「パリゴロ」とか「ロンドンゴロ」と呼ばれているらしい。

「蘭癖家」といい、「ゴロ」といい、「海国異人」と同じ穴の狢というべきか。

こうした言葉たちを共通して貫くイメージは、公認された目的もなく、あるいは目的を喪失したまま、さらには目的を秘匿しつつ、異国をうろついている姿である。漂流民のように不慮の災難が異国に拉致したわけでもなく、国家が正式に派遣した留学生でもない。

目的は定かでないにせよ「海国異人」は自らの意志で異国に旅立ち、国家の後ろ盾を欠いている。換言すれば、「外部」へ自己を開いていきながら、歴史の表舞台からは疎外されている存在である。「蘭癖家」だとて、そのような外在を内面において完結させた存在ではなかったか、とするのは付会にすぎようか。

日本が長い鎖国から「外部」へ開いていった幕末という歴史的転換期に、この「海国異人」たちの姿が目立つのは必然的な現象と言えるかも知れない。

例えば、文久二年（１８６２）年、フランス人モンブラン伯爵の助手としてフランスに渡り、翌年の池田長発ら鎖港談判使節の世話をしながら、以後消息を絶った斉藤健次郎などその典型的な人物である。斉藤健次郎について、その事績を扱った研究は寡聞にして知らない。

谷戸喜三郎の、閑却されるにはあまりにも口惜しい行動と思想をたどりながら、「海国異人」のアイデンティティにどこまで肉薄できるか、さらに歩を進めたい。

この一文は、その後見出した若干の資料をもとに、谷戸喜三郎という名の海国異人の帰国後の足取りを尾行したものである。また、いくつかの論文で、谷戸喜三郎が別の人物と混同されている事実があり、永らく気になっていた。歴史の表舞台についに現れなかったゆえに無視されるのは歴史の非情であり、とやかく言っても詮無いが、別の人物と混同されるにいたっては看過し得ない。

Ⅱ　谷戸喜三郎とは何者か

―史料に散見される谷戸喜三郎あるいは研究史概観

ここでは谷戸の事績を時系列で追いながら、関連の研究を振り返る。

先の『国際人事典』は、「八戸喜三郎」の名のもとに『万国新聞』の二編の記事を引用するのみで独自の記述は一切ない。管見の限り、研究論文で最初に谷戸に触れるのは田保橋潔の名著『近代日鮮関係の研究』（1940）であり、谷戸が香港の新聞に投じた記事が日朝関係に波紋を引き起こした事件に触れた後、次のように記している。

「八戸順叔について旧幕府遺老の伝えるところに従えば、彼は代官手代八戸厚十郎の三男で、後姓を太陽寺（？）に改め、明治維新の際、上野国高崎藩の雇士となり藩制改革に参与し、後東京府及び地方の属官に任ぜられた。幕末数度ヨーロッパに渡航した経験があると云ふ。上述の投稿は、その途上海・香港等に滞在中の所為であろう」

外交問題を惹起させることで、歴史の暗闇から不意に浮上した谷戸当人については伝聞以上の記述を欠き、あまつさえ、「太陽寺（？）」としたところに田保橋の当惑が見えるようである。（無理もない。この記述からは、田保橋が旧幕府遺老たちの証言に荒唐無稽の感さえ抱いている臭いすら漂う。しかし、太陽寺への改姓を含め、証言は意外に真実を伝えていることを徐々に明らかにしていく）

（1）万延元年前後

それから半世紀近く閑却され続け、次に歴史の微光のもとに連れ出したのが福永郁雄氏の「「順叔　八戸先生」の消息』（「明治村通信」216・217、昭和63年）である。（これより前に、谷戸に触れた沖田　一「ノースチャイナ・ヘラルドの幕末時の日本関係記事」（『龍谷大学論集』第417号、昭和55年）があるが、「八戸の身元については明らかでないが、このころの上海関係資料には出没する人物だ。」とするに止まる。）

福永氏の谷戸へのアプローチは、氏が専ら追跡していたアメリカ人の商人ヴァンリードとの関わりに根ざしている。福永氏は、勤務先の森村商事の創始者、森村市左衛門の懐古談から次の一行を引かれている。

「其内通弁喜三郎と云ふ人にあって、米国人「ベンリウト」といふ人に、　初めてあいました」（森村市左衛門演説）

万延元年のことである。谷戸が初めて歴史に登場する記念すべき年で、後述する天保十一年（西暦1840年）生まれから弱冠二十歳である。米国人「ベンリウト」（ヴァンリード）と森村の「通弁」（通訳）を務めた二十歳の若者は英語に相当通じていたことになる。

その後はヴァンリード商会の通弁、買弁として横浜を拠点に活動していたと思われる。

（2）元治元年（1864）

元治元年7月（1864年9月）、英米仏蘭四カ国連合艦隊が長州藩の下関砲台を砲撃した馬関戦争を従軍取材したヴァンリードの近辺に谷戸がいた事は、「長州下ノ関戦争日記」（国会図書館蔵宮塚叢書）の記事でうかがえる。

「呈
合衆国水師提督
弘光云合衆国とは亜米利加の事也支那人の譯に在之て其謂れ亜米利加帝国に無之悉く合衆して政事をなす此和議の書面は英仏亜蘭…」（傍線引用者）

「長州下ノ関戦争日記」については、杉浦正『岸田吟香―資料から見たその一生』及び福永郁雄「元治元年のルポルタージュ」（『明治村通信』No.210.211、昭和63年）に取り上げられている。特に前者では全文が翻刻されているが、引用部分はない。両者とも拠った原本は八戸市立図書館蔵の「八戸藩南部家資料」中の「新聞誌」と題された一冊で、宮塚叢書本に見える「弘光云」以下の引用部分を含む三行分を欠いている。

タイトルも、「新聞誌」が、

「長州外国／戦争日記　亜墨利加
軍艦ターキアン乗組
ウエンリト」

宮塚叢書は、

「元治元子年
アメリカ／フランス／インゲリス／ヲランタ
長州下ノ関戦争日記　宮塚」

であり、微妙に異なっている点、本文も同様である。宮塚叢書は15冊からなり、十五册末に「宮塚正義　筆記」、後見返しに「明治十九年四月」とある。『国書総目録』は「宮塚正義編」とするが、宮塚正義なる人物が何らかの底本から明治19年に転写したものだろう。

福永氏によればこの記録は、元治元年九月（正確には八月。九月は西暦）に起きた英米仏蘭四カ国連合艦隊による下関砲台攻撃事件、いわゆる馬関戦争にあってアメリカの艦船タキアン号に乗り組み、戦況を取材したヴァンリードの日録とされている。だとすると「弘光云」以降は不審である。アメリカ人ヴァンリードにアメリカ合衆

国の国体を説明するのはいかにも不自然である。この点については、「現地ルポルタージュを、その場で、ヤベ喜三郎（福永氏は「八戸」、「谷戸」を「ヤベ」とする）に翻訳させ、『新聞紙』（「長州下ノ関戦争日記」）にした」との福永氏の推測を裏付ける。「弘光云」の部分は翻訳の過程で、谷戸が自ら日本人の読者のために、ヴァンリードから得たアメリカに関する知識をもとに注釈を加えたものと解したい。福永氏はさらに次のように述べる。

「八戸藩資料中に残されている元治元年八月の『新聞紙』の記事が、私には、ジャーナリスト、ヴァン・リードの、かれの周囲にいるヒコ、のちに一流のジャーナリストへ成長した岸田吟香、ヤベ喜三郎などへの、「率先垂範のルポルタージュ」、実地教育だったように思えてならないのである。」

（3）慶応元年「乙丑」（1865）―　米国密行

翌年、

「ヴァンリードは八戸（やべ）喜三郎を同伴して、一八六五（慶応元）年に転地療養のためにサンフランシスコへ旅立った。」（福永郁雄「ヴァンリードは〝悪徳商人〟なのか」――横浜開港資料館横浜居留地研究会編『横浜居留地と異文化交流』、山川出版社、1996年）

＊幕末外交史関係の一等史料『続通信全覧』に収録されていない「幕末外交関係雑纂」（外務省外交史料館蔵）中の「遣欧使節一件（万延元年―慶応二年）」（文久元年、竹内保徳を正使とする幕末最初の遣欧使節に対する幕府の指示事項を記したもの）に、「（政府ノ訓令及使節又ハ関係役所ヨリ政府ヘ申稟附指令）「外国人ニ於テ其雇日本人ヲ猥ニ連レ伴フ件ハ我国目下ノ国情ニ於テ人心ノ不穏ニ影響スルコト大ナルヲ以テ外国公使ニ於テ一時随伴セシムルノ外一切之レヲ禁止スベキコト」の件があり、当時、来日外国人が公私を問わず、日本人用人を伴って帰国することが稀ではなかったことを伺わせる。

谷戸の渡米について、福永氏はつとに「『順叔　八戸先生』の消息」（『明治村通信』No.216.217、昭和63年）で詳細に追求されている。慶応元年の陽暦四月に出発し、サンフランシスコ到着以降の足跡を、ルイス・リチャード　「レディングを訪れた初期の日本人たち」（『バークス郡歴史研究会報』第1巻、1910）や『バークス郡歴史研究会報』第2巻、1910）所載のジェイコブ・ナブによる記事をもとに確認している。同年の秋には、単身、ヴァンリードの故郷ペンシルベニア州レディングからワシントン、ニューヨークなどの東部の諸都市を歴訪し、ワシントンでは第17代大統領ジョンソン（当時59歳）、シュワード国務長官にも謁見したという。

ニューヨークでの見聞が手紙に認められ、慶応三年五月下浣発行の『萬国新聞紙』第四集に掲載されている。ニューヨークの刑務所事情を現住する香港の見聞を交えて記したものである。詳細は前稿に譲るが、この手紙をめぐる不思議な記述については、再度取りあげておきたい。

慶応二年幕府が派遣した最初のイギリス留学生の一員である川路太郎の祖父で、幕末の開明派能吏としてつとに有名な川路聖謨の日記『東洋金鴻』（川田貞夫校注、平凡社、１９７８、東洋文庫３４３）の慶応三年六月三日に見える次の文である。

「四月横濱新聞紙に、当時香港に居る日本人谷戸喜三郎の書状を出せり。さしてのことはなし。末にベーリー先生は、戸順叔と有り。太郎などは、大日本布衣以上の御役人なり。一言一句にても深く慎み、遠く慮て、万一五世界に洩れ、日本へ聞こえても、人人感服する様に心附くべし。喜三郎の書状をみて、大いに恐怖して記す。」

（傍線、引用者）

「末にベーリー先生は、戸順叔と有り」は、「末にベーリー先生八戸順叔と有り」の翻刻の誤りである。つまり、書状の名宛人「ベーリー」と差出人「八戸順叔」の名前が末尾に書かれていたわけである。（翻刻という地味な基礎作業の重要性を再認識させられる）

「横濱新聞紙」とは、イギリス領事館付宣教師ベイリー（ベーリー）が慶応三年正月に発刊した「萬国新聞紙」を指すものと思われるが、『幕末明治新聞全集』（木村毅編、世界文庫、昭和41年）の第2巻に収録された同紙「慶応三年五月下浣」号の当該記事の末は「ベーリー先生」とだけで、「八、戸順叔」、つまり「八戸順叔」は見当たらない。該紙は贋本まで出ているというから（同書解題）、原文に異同のある数種があって、川路の見たものと『幕末明治新聞全集』の底本が異なっているか、翻刻時の見落としと考えるほかない。また、「四月横濱新聞紙」と「五月下浣」号との食い違いは、川路の誤解であろう。

『幕末明治新聞全集』の当該記事の末は、

「「アメリカ」中「ロングアイランド」ハ僕前年ウエンリードなるものゝ導きニ依て彼國ニ遊び実見する所なれば、更ニ虚談にあらず。

ベーリー先生」

とあるが、「慶応三年五月下浣」の前年、慶応二年の一月に谷戸はサンフランシスコを出発していて、「ロングアイランド」に遊ぶ可能性があるとすれば、前々年の秋にペンシルバニア州レディングを訪れた折である。この違いは「萬国新聞紙」に掲載された手紙を認めたのは前年の慶応二年だったとすればつじつまも合う。

この記事と先の福永氏の説を綯い合わせれば、谷戸喜三郎は慶応元年の秋から翌慶応二年にかけてワシントン、ニューヨークなどを歴訪したことになる。

（4）慶応二年［丙寅］（１８６６）―　帰国へ

その後谷戸喜三郎はサンフランシスコに戻り、結核療養のために逗留していたヴァンリードと再会し、慶応二年丙寅一月（１８６６年2月）、リベル（Libell）号でサンフランシスコを立ち、ともど

も帰国の途に就いている。途中ハワイのホノルルに立ち寄ったことが現地の新聞 "The Friend" 紙（ハワイ大学図書館蔵）の報道でわかる。次に全文を紹介する。

＊"The Friend" 紙はその紙名から、またヴァンリードの出身地であるペンシルバニアが "The Society of Friends"（キリスト友会、"Quakers、クェーカー教。日本では基督友会と称し、新渡戸稲造や内村鑑三が一時入信している）のペンによって開拓されているところから、この宗派の機関紙ではないかと疑ったが、アメリカ議会図書館に問い合わせた結果、海員組合の機関紙で、キリスト友会とは無関係であるとの回答を得た。

〈"The Friend" New Series, vol. 17, no. 3, Honolulu, March 1, 1866 {Old Series, Vol. 23〉

"Kisaboro, The Japanese Traveler.—On the return of this gentleman from the United States to Japan, he spent a few days in Honolulu. He travels in company with Mr. Van Reed, an American, connected with the house of Hurd & Co., of Japan and China. Kisaboro belongs to the "upper ten" of Japan, and wears to swords. He is a careful observer and notes in his memorandum book whatever he considers worthy of record to take back to his native land. While at Washington he was introduced to President Johnson and Secretary Seward. He was peculiarly impressed with the style of pardoning rebels in America, in comparison with the summary (samurai?) method of chopping heads off in Japan, or commanding the rebel to fall on his sword!（切腹を命じる）We are glad to learn from him that Hiko, the protege（治外法権の下で他国によって保護されている人）of Senator Gwin, and also that Mangero, the translator of Bowditch's Navigator, are still alive. Some of our readers may remember Mangero, s visit at Honolulu, in 1850 and 1860, as the interpreter of the Kandinmarah（咸臨丸）, the Japanese steamer."

＊（　）内は引用者註

「元旗本」の身分が "upper ten" に該当し、大統領、国務長官に謁見したこと、政治的反逆者に対する処置の日米間の違いなど、福永氏がすでに指摘されている。指摘のほかに注目したいのが、谷戸がジョセフ・彦や中浜万次郎と親交があったらしいという点である。（二人の健在を知っていたことが、直接親交があったとは言えないにしろ、彦とヴァンリードとの関わり等を考慮すれば、その可能性は大いにある。そうでないとしても、「海国異人」として二人に同志的な親近を抱いていたことは間違いない。）

"memorandum book" に何が記されていたか興味深いが、今のところその存否すら不明のままである。

ホノルルに数日滞在した後、香港に向けて航行中、船がウェーク島のリーフで座礁する。ボートで脱出した乗客は十三日間漂流の後、グァム島に着く。

ハワイからの旅に関し、『万国新聞紙』三集（慶応三年三月下浣）に「サンドウィチ島」なる見出しの記事が見える。ウエンリートがサンドウィチ島（ハワイ島）の知人に送った書牘の体裁である。

「支那人「ハワイ」島人並に日本人八戸喜三郎余と同しく「ホノルル」島　より「リベル」船に乗して「ホンコン」日本に向けて出帆せしに、余輩実に不幸にして乗し所の船艦を破壊したり。此夜万死を逃れ、漸くにして　明朝激浪の間を凌きてある島に達す。」

無人島だったこの島で23日間過ごした後、小舟に分乗し着いたのがグァム島であった。グァムから香港に行き、香港から横浜に向かった模様である。

（5）慶応二年［丙寅］六月　―　帰国へ

福永氏は前掲論文で、二人はグァム島から香港、上海を経由し、六月三十日に横浜に着いた、とされる。しかし、上海から横浜に向かったのはヴァンリードだけで、喜三郎は上海に残った可能性がある。同文書に「今般ウエンリート再渡に付ては当時喜三郎には上海に罷在候間」なる記載が、『続通信全覧』の「米国商人ウエンリート帰国小使随従一件　自丙寅六月至丁卯八月」の慶応三年五月二十四日付け文書に出る。ヴァンリードの再渡から一年近く経った時点で喜三郎が上海にいた事実を証す記述といえよう。

この「米国商人ウエンリート帰国小使随従一件　自丙寅六月至丁卯八月」は、ヴァンリードと谷戸喜三郎の帰国の事情を伺わせる唯一の史料である。15件の文書よりなる最初が、慶応二年六月付、神奈川奉行早川能登守の申稟（伺い）である。（以下に全文を掲げた）この申稟は外国奉行、勘定奉行、勘定吟味役、外国掛大目付、御目付間の合議に付された。

無届出の外国渡航は違法である以上処罰は免れないのが原則であるが、原則通りであれば谷戸喜三郎を帰国させるわけにはいかない。外地に留まることになれば「国害」も惹き起こしかねない。現在は渡航が解禁されている事情もあり、処罰を「差免」し、帰国を認めてほしい。ヴァンリードのこの申し立てに対し、処罰の件は棚上げにし、谷戸喜三郎をとにかく帰国させることを先決にしたいというのが神奈川奉行の申稟のあらましである。外国奉行はこれを了承、添付して外国掛大目付、御目付に回付した。

「御国人外国へ罷越候儀未た御差許不相成以前の儀にて雙方不埒の段申迚も無之何連とも速に當人寄港いたし候様可取計候儀は伺候迚も無之筋」とし、添付の申稟は「返上」する、という強硬な評議だったものの、帰国させる点では異議はなかった。勘定奉行、勘定吟味役の意見は、外国掛大目付、御目付の評議が正論であることを認めつつも、渡航解禁等の「変通」の折でもあり、「御仕置」を恐れ帰国を断念、現地に留まれば「耳目」（スパイほどの意か）にな

りかねない等の事情を勘案し「寛大の御処置」を求めている。申稟は同九月中に決裁されたもようである。

「丙寅六月

横浜表居留商人ケーイ方に同居罷在候同国商人ウエンリート儀今般再渡いたし候を以去月二十六日大田町名主にて外国人家守源左衛門代の者へ面会いたし度旨申越候に付同人代啓次郎瀧三郎儀罷越候處ウエンリート儀本国おゐて横浜表コンシスルの任を請此程再渡いたし

此儀コンシスル申付請候由はウエンリート

申聞候蚤にて信用難仕候

然る處去丑三月中帰国いたし候節兼て召使置候小仕三河町四町目家持藤兵衛弟喜三郎を其筋へ不申立親に同船いたし本国へ召連候所此度再渡いたし候に付ては喜三郎儀も帰港為致度候處当節と違ひ昨年中は御国人無謂外国へ罷成候儀難相成御国法の趣兼て承知罷在外国行の儀被　仰出候以前召連参り候ものに付帰港いたし候得は如何様の御仕置に可相成哉夫是心配且同人儀御国法相背候とは乍申諸々御国の御為可相成哉と相心得其訳は各国繁盛の地へ遊行いたし其国々の地理国政向人物気質其他悉研究日記へ認取候付右筆記は実に御国へ取候ては一ト廉の儀とも可相成哉に付右筆の規模を以帰港御差免相成候様相頼度候得共右は御聞届難相成當人御咎に相成候は無詮議に付連帰不申心得に付其邊相含其筋へ内々伺呉候様ウエンリート申聞候に付前書の次第に候ハヽ同人より直に私共へ申立候方可然啓次郎外壱人にて取扱参候趣相答候處左様には可有之候得共右様之儀私共へ直に引合候ては筋違ひに付兎も角も内伺いたし其模様早々申聞呉候様相頼候趣を以啓次郎外壱人より市在取締掛支配向のもの迄申立候趣申聞候に付勘弁仕候處右喜三郎儀ウエンリート帰国の節倶々外国へ罷越候不届は難逃ものに有之候所ウエンリート儀喜三郎御仕置筋御宥恕無之候ハヾ不連帰との申立は心得違にて御採用難相成筋に御座候得共近来海外諸国へ学科修業又は商業のため罷越度志願のものは願出次第御差許可相成趣御触并留学の儀に付被仰渡の趣も有之漸々御国法御変革の御時節にも有之且喜三郎儀帰国の上は御仕置可相成趣等承り候而は迚も帰国は致間敷一体同人儀は文学も箇成出来候ものに有之帰国の念を断彼國に罷在候は必密商は勿論通信等以外の御不都合生し可申彼壱人の御所置より御國害を醸し候様に而は不容易と大是深心配仕候に付ウエンリートへは喜三郎帰国為致候儀を主といたし申諭前書之通り内意承り候迄御宥典可相成と差極挨拶は難及候得共重き御沙汰には相成間敷と程能申諭喜三郎帰国為致彼の方は食切候上猶御所置相成可然哉と奉存候間右見込を以取計候様可仕哉此段御内慮奉伺候以上

寅六月　　早川能登守」

（6）慶応二年十月　―　『英航日録』『英行日記』の谷戸喜三郎

慶応二年の幕府派遣イギリス留学生、川路太郎の『英航日録』、慶応二年十月晦日付にの次のくだりがある。十月二十六日深更横浜を出航し、最初の寄港地上海に到着した日である。

「日本人一名に遇然會遇しけり。此人は同船の亜人(米)シェンリー（ママ）トより話を聞ける人なり。其身分は元旗本の次男某にて横浜に先年遊びそれより亜人に逢ひ此地に至るよし。頗る書を能くし詩文に通じ英語も能くなせり。性質至極宜敷相見ゆ。聊か感ずべきは甚だ政府の御為を思ひ居たりき。既に懐中より上海新聞を出し、其中、近時日本政府の御政体を賞したる處を出し見せたり。……此人は上海にては有名のよし。既に香港新聞にも日本人「恪」の名を揚げたりといふ」

この「日本人」こそ谷戸喜三郎であることは、箕作奎吾の『英行日記』中の同日の記事「ヘボン宅へ至り岸田銀次郎へ面会す　此朝喜三郎と申者来り種々談話をなし候処此人は田中廉太郎の弟の由なり」を傍証に、前稿で指摘した。ヘボンは畢生の和英対訳辞書『和英語林集成』の印刷のため、岸田銀次郎こと吟香を助手に伴い、10月に上海に先着している。後述するが、谷戸と岸田は親友同士といった間柄である。

陳捷「幕末における日中民間交流の一例――知られざる日本人八戸弘光――」（『中国哲学研究』第24号、2009年）は、「この記録にはその人物の名前は明記されていないが、「恪」は「順叔」と意味が通じることや、書画や詩文に通じている一方、英語にも堪能であり、上海・香港いずれにおいても有名であること、新聞に掲載された日本政府を褒め称える記事を見せつけていることなどから考えて、八戸弘光に間違いないと思われる」とする。

＊『恪』を名前とするが、はたしてそうか。原文に当たれないので推測に止まるが、「格」の翻字の誤りの可能性を疑う。「恪」を弘光の別称とするには、証拠がない。「日本人『恪』」と括弧の強調は、名前では唐突の印象は否めない。むしろ、「日本人『格』」で、「日本人の評判」ほどの意、括弧は「言わば」と譲歩した言い回しと解する方が文脈上なじみやすいのではないか。

『英航日録』は原本未公開で、著者川路太郎の嫡孫、川路柳虹氏の『黒船記』に抄出紹介されているもので、抄出過程の翻刻の正確さについては括弧を含め疑問なしとしない。確認したいところだが、その原本が現在行方不明らしいのは残念である。

谷戸自ら書いた「近時日本政府の御政体を賞したる處」を掲載する「上海新聞」を出して見せた、とのくだりは、前述の田保橋論文が触れている寄稿記事を思い起こさせる。しかし、その記事は、同治五年（慶応二年十二月十二日）広東発行の「中外新聞」に谷戸の寄稿文を要約して掲載したことになっている。

「聞日本名儒八戸順叔言」で始まる記事は、日本の政治が大君を中心にした二百六十諸侯の合議制へと革新を遂げつつあり、陸海軍の近代化も進み、英国留学生や中浜万次郎ら人材も豊富であること、国威発揚をはかっていること、そして五年に一度の朝貢を廃した故をもって朝鮮を征討する志のあることを述べている。この征韓論が清国を通じて朝鮮に伝わり、外交問題を惹起したものである。

『ウィキペディア』には、この問題を「八戸事件」のタイトルで扱った長文の論文があり、次のように述べている。（"ja.wikipedeia.org/wiki/八戸事件", 2014年2月19日アクセス）

「これまで述べたように日・清・朝三国の外交問題にまで発展した事件の端緒は、八戸順叔なる謎の日本人が広州の新聞に寄稿したという「征韓論」の記事である。ところが、実はこの記事は現在に至るまで、その原文が見つかっていない。現在伝わるのは清朝総理衙門による引用文（照録ママ）のみであり、果たして本当にそのような記事が存在したのか、実際に日本人が書いた記事なのか、そして八戸順叔という人物がいったい何者なのかなど、定かでないことが多い。

田保橋潔の『近代日鮮関係の研究 上巻』（１９４０年）は、問題の記事は同治5年広東で発行されていた『中外新聞』の12月12日版に掲載されたとする。しかし当時、広東には『中外新聞』という新聞は存在していなかった。曽虚白『中国新聞史』によれば、『中外新聞』は広州ではなく、寧波で発行されていた新聞である。… 清国礼部から朝鮮への密咨に附された新聞照録5件に関しても、新聞名や日付の記載がなく、どの新聞から転載されたのかは不明である。」

陳捷の前掲論文によると、「新聞照録5件」のうち2件が「八戸順叔」の投書である。「本当にそのような記事が存在したのか、実際に日本人が書いた記事なのか」については、八戸（谷戸）が書いた原稿をもとに記者が記事にしたというのが真相に近いのではないか。記事のネタならまず保存されることはなく、原文は見つからない。また、同じ記事が複数の新聞に配信されることもあったことだろう。八戸（谷戸）の2件の投書が上海と香港の新聞だったとしたら、川路の記述に符合する。陳捷が推測するように、記事の掲載には、この頃八戸（谷戸）と親交を深めていた王韜の後押しがあったことは充分に考えられる。

また、陳の同論文が紹介する王韜の『甕牖余談』中「日本宏光」なる文章に「年僅二十六歳」とあり、ここに谷戸の生年がようやく判明する。この記事が書かれた年が慶応二年、当年二十六歳ということは、天保十一年（西暦１８４０年）生まれとなり、天保人と呼ばれる世代であることがわかる。

陳捷はさらに「慶応二年（一八六六）に八戸（谷戸）弘光が琼記商会の仕事のため広東に滞在した…」とするが、根拠は示されていない。

＊陳捷のこの論文は、拙稿（「谷戸喜三郎―海国異人の肖像と足跡」、

『あうろーら』所収）に続いて、谷戸喜三郎ひとりに焦点を絞り、中国側の史料にも目配りされた意欲的な論考（谷戸が中国の文人たちと交わした直筆の詩文の貼り混ぜ帖である、早稲田大学蔵『李長栄ほか詩文貼込帖』の翻刻、紹介を付載する）だが、拙稿を充分に踏まえていない点で残念である。谷戸の生涯に決定的な影響を与えたアメリカへの密行に伴う、曲折ただならぬ帰国の事情を友人岸田吟香の「はまつと」の一文で確認しているが、幕府中枢、神奈川奉行、ヴァンリード間のやり取りを詳細に検討した拙稿を踏まえているのであれば、『続通信全覧』にはっきり記録されている事実を見逃すはずがない。あやふやな私人の日記に頼るより、公式記録に拠るのが歴史研究の常識ではないだろうか。

（7）慶応二年十二月～慶応三年三月　―『呉淞日記』中の谷戸喜三郎

慶応二年十月、岸田吟香はヘボン畢生の和英対訳辞書『和英語林集成』の編纂を手伝うために上海へ渡っている。『呉淞日記』は、その慶応二年十二月朔から翌年4月4日までの上海滞在日記である。その中に頻りに顔を出す「弘光」なる人物は、実は谷戸喜三郎その人である。しかしながら、この人物同定にいまのところ明確な資料的裏づけがあるわけではない。『呉淞日記』に散見される「弘光」の行状が、他の資料中のそれと符合する事実によるものであり、言わば状況証拠にとどまる。

とりあえず、『呉淞日記』から「弘光」が出てくる主要な箇所を拾い出してみよう。

「琼記へよりてきけバ、弘光とほからずかへるといふ」（慶応二年十二月十五日）

＊「琼記」とは、「きんき」すなわち、「オーガスティン・ハード商会」である。「きんき」に吟香は「琼記」の漢字を当てているが、ディレクトリー上は、主として「瓗」であり、上海の項に見えるアルファベット表記の「King-kee」の発音をなぞったものらしい。

谷戸の雇用者である「ヴァンリード」は、「オーガスティン・ハード商会」横浜店の一員である。"China Directory"、"Chronicle and Directory for China, Japan and the Phillippines"の1862年版から1866年版に見える。（『幕末明治在日外国人・機関名鑑』第1巻：1861～1875、ゆまに書房、1996）

1866年版には、「Eugene M. Van Reed (absent)」とあり、本国へ帰国中のため休職扱いとされていたのだろう。

なお、'Chronicle and Directory for China, Japan and the Phillippines"の1864年版では、「Van Reed, E.M. surgeon」とある。"surgeon"は、「外科医、軍医、船医」である。商人、ジャーナリストとされていたヴァンリードの経歴の再検討を迫りそうである。

「琼記に去て問ふに、弘光ハ明年にあらされハかへらずと」（慶応二年十二月二十二日）

「弘光はんこんからかへりましたといふてくる。」（慶応三年正月十日）

＊香港で谷戸は璟記館（ヴァンリードが日本駐在社員として働いていた貿易商社オーガスティン・ハード商会の香港支社）の仕事をしていたと思われる。その間、伊豆国附八丈島御船頭である長戸路収蔵ら、乗組員総勢三十六人の船が、浦賀港から八丈島に向かい、帰途、難風に逢い、漂流しているところを清国の漁船に救助されて香港に入港するという事件があった。その時の模様を録した長戸路収蔵『海上日記』には、入港後、谷戸が長戸路らの世話をし、帰国までの一切の面倒をみた経緯が綴られている。

「よる弘光きたる。…香港の新聞紙八枚かしてくれる」（慶応三年正月十二日）

「あすとルはうすのまへに、弘光にあふ」（慶応三年正月十三日）

「きんきへいて見るに弘光ハるすなり。」（慶応三年正月十五日）

＊この日は、将軍徳川慶喜の名代としてパリ万博へ参加する実弟の徳川民部大輔昭武使節と高橋怡之介（のちの高橋由一）、名倉予何人ら、浜松藩、佐倉藩士による上海使節団が入れ違いに上海に到着した。パリ組の山内六三郎や清水卯三郎、本間潜蔵、箕作麟祥、田辺太一、上海組の高橋、名倉、鏑木立本らの旧知の面々とにぎやかに再会する。

「黄昏にきんさへいく。弘光るす也・・・夜になりて弘光きたりて、」（慶応三年正月十七日）

＊高橋らの一行は上海の当初の宿所、「あすとルはうす」は昭武一行が止宿することになったため、「やどにさしつかへてこまっていた處へ弘光いきあはせて、いろ〳〵せわをして、ぷらだァはうすといふ旅館（ホテル）へとめてやる」とある。

前掲、沖田　一「ノースチャイナ・ヘラルドの幕末時の日本関係記事」は、高橋ら一行の一員、安部安太郎の筆録を紹介している。「八戸喜三郎ト申もの来り暮前の事故幸ひ此男に議し西洋館江かり（ママ）合候所米国の館にてアスタハウスト云ふ異人館に泊り可中の処に折節徳川民部郷（ママ）并ニ御同勢の御旅館ニ相成不得止直に東英国の館にてフラダホテルと申異人館有之是に一泊す」とあり、谷戸は一行のホテルの世話に奔走したようである。

「よる弘光きたりて、ケふは高橋、かぶらきの處へいて、鱸のさしみで酒をのんだといふて、…よがふけたから弘光とまる。弘光ハあめりかと日本との飛脚船の事について今夜相談にきたのなり。」（慶応三年正月十九日）

＊ヴァンリードは『萬國新聞紙』に、「アメリカ江学問修業交易又は見

物遊歴ニ渡海被成度者は随分御世話可中候　横浜九十三番　ウェンリード」なる広告を載せていることや、岸田吟香が翌年、ヴァンリードと東京横浜間の定期船運航事業を始めることと無関係ではないと思われる。ヴァンリード、岸田、谷戸三者の緊密な関係が伺える。

「よる弘光来る。新聞紙の事について、相談することありて也。」（慶応三年正月二十三日）

慶応三年3月22日上海を発って香港に向かうまでのこの時期、谷戸は使節団のガイド役として精力的に動き回るとともに、岸田を交え、高橋、名倉らと公私を分たぬつきあいぶりを見せている。酒食はもとより、紅灯の巷に繰り出して異国にある同胞同士の熱い親交を繰り広げる。

慶応3年3月21日（1967・4・25）に注目すべき次の記事がある。

「ひるから、きんきへいてみるに、弘光、明日、香港へいくとて、したくをしている。曾我彌一といふ人がきてゐる。きのふ逢た。處々あるいてきたさうだが、香港で日本の女の三味線をひいてゐるのを見たといふ。うささんの組よりあとから、また出たのだらうといふ。支那文字の新聞紙に日本の事をわるくいふてあるのが出た。くやしいわけだ。なんとか返報してやりたいもんだといふ。これまで弘光、新聞紙館の先生にたのんで、日本の事をたいさう自慢してかいて出したから、支那のものがはらをたてゝそんな事をしたのだらうとてわらふ。」

曾我彌一とは柳川藩士曾我祐準のことで、脱藩し慶応2年10月、インドへ密行した人物だが、その『西遊日記』の慶応2年12月5日の項に、

「…江戸人八戸順叔なる者、米人ヴンリーに従ひ琼記洋行に寓すると聞き、前数士と之を訪ふ。不在。江戸の書生銀次郎（岸田吟香）英の寺院に在り、之を訪ふ。」

と見え、インド行の途中で谷戸や岸田と知り合い、帰途、慶応3年3月上海に15日滞在している折のことである。

「支那文字の新聞紙に日本の事をわるくいふてあるのが」のくだりは、次の "The North-China Herald and Market Report" (April 27, 1867) の記事（次に全文を利用した）に該当する可能性がある。前掲、沖田一「ノースチャイナ・ヘラルドの幕末時の日本関係記事」によれば、"The North-China Herald"、1967年4月27日に、

"We publish elsewhere an interesting paper on Japan, read before the Asiatic Society last week by Mr. Macgowan, the East India Telegraph Company, s agent in China."

と記されている。"elsewhere" が "The North-China Herald and Market Report" であり、本誌の "The North-China Herald" の

ほかに別号が出されることは、「1864年からはデーリー・ニュースと併刊されている例」（沖田、前掲）がある。"Mr. Macgowan" が "Macgowan, Daniel Jerome" だとすれば、もともとは「アメリカ・バプテスト派医療宣教師」（武内博『来日西洋人名事典』）である。

'a reply' の筆者を谷戸と推定するのは、三つの理由からである。まず、上海、香港を舞台に谷戸以外に当時"old Chinese character" を駆使して言論活動を行っていた人物は見当たらないこと、上海新聞に載せた征韓論がそうであるように、その主張が極めて過激であること（"the youth would, without exception, rush to arms to avenge the insult"、「日本のすべての若者はその恥辱を雪ぐべく武器を執って突撃するだろう」）、そして時期的にも符合する点である。

"Mr. (Dr.) Macgowan" は、1967年4月27日の 'last week'、4月20日頃 "the Asiatic Society" において日本と日本人を侮辱する講演を行った。新聞でそれを知った谷戸は、「なんとか返報してやりたい」とすかさず反駁の文章を投稿し、それを "The North-China Herald and Market Report" が採り上げた、という次第ではなかったか。

「甚だ政府の御為を思ひ居たり」、「近時日本政府の御政体を賞した」佐幕派国士、谷戸の面目躍如といえるべきである。「性質至極宜敷相見ゆ」と見た川路太郎と同様、前稿で谷戸の風貌を、福永氏が前掲論文で紹介されている、レディングでの谷戸の写真から「眉目の詰まった金壺眼に優しい口元が印象的」と述べたが、うわべの穏健を裏切る過激の相貌は谷戸という人物を語るとき逸せない要素である。

（参考）"The North-China Herald and Market Report" (April 27, 1867)

"The paper lately read by Dr. Macgowan before the Asiatic Society, deals with several questions which intimately affect the future of Japan. It dwells not only on the mental, but on the physical characteristics of the people, and draws inferences as unfavourable to the latter as flattering to the former. He fears that the unrestrained licentionsness (ママ、licentiousness) which is so prominent a feature in the national character, is tending to decrease the population; and, in expressing this fear, is only reiterating a surmise which has occurred to other interested observers of the country. We may, however, mention here an interesting circumstance in relation to this statement. The gist of Dr. Macgowan's paper was translated into the Chinese newspaper issued from this office, and produced a reply, written in old

Chinese character, from a Japanese resident in Shanghai. The writer does not speak courteously of the knowledge which prompted the accusation in question against his country, and declares that if it were to become widely known in Japan the youth would, without exception, rush to arms to avenge the insult. He speaks more pertinently, however, when he asserts that Japan has a population of nearer fifty than sixteen millions and that licentiousness is not more disastrous in its effects there than in this neighbouring kingdom of China. In effect, in the absence of those accurate statistics which the elaborate machinery of Western governments enables them to gather, it is impossible to certify the correctness of the surmise. But the known existence of the cause alleged, itself furnishes strong ground for apprehension that it is producing the effect.Dr. Macgowan hopes that the possible christianisation of the people may serve to arrest this tendency, supposing it to exist, by improving their moral character. We may add a hope that the energy of which they have given proof, will impel them to shake of the sensuality into which they have sunk, during a long isolation from foreign intercourse, by directing their powers of mind and body into the new channels of enterprise which the advent of foreigner has opened to them.

（下線は引用者）

この記事はかなりのセンセーションを惹き起こした模様で、三ヵ月後にフランスの新聞が取り上げている。澁澤栄一の『航西日記』慶応三年丁卯六月二十二日（1867年7月23日）に、「カリナニ新聞」から翻訳した次の引用がある。（『澁澤榮一滞佛日記』、日本史籍協会叢書126、東京大学出版会、昭和42年覆刻）

「第七月二十三日日本の向化

日本人の心術行事に就て東洋にありて一議論起れり先年初て日本と貿易を開し頃外国人の日本風俗を論ずるものゝ説には日本人は平生心術所行といふものなく只淫楽に耽るを事とするのみなりとせり其譯は彼國茶肆の模様を以て考證せり

先年シルルーセルホールトアールコック日本の内部を旅行せし時茶肆の制言しからざるを見て其流弊を恐れ茶肆の外は好旅舎のなかりしもこれに泊するを嫌ひ別に旅宿を設けらるゝことを請たりといくり

又支那上海にある曾て寧波の教士として現に東印度電信社の佐たる米人ドクトルマクゴウアン前の説を主張して亜細亜學會の坐に於て日本人の懶惰淫逸にして汚俗なるを以て其性情も日に

下り其人口も年に減ずべきよしを述たり然るに近来其説蔓延して竟に上海に刊行せる支那文の新聞紙に載たるを以て漢字を解する日本人支那古文字にて駁詞を書せり

侠勇の氣を具へたる日本兒其挾む所の長刀にかへて筆を以て議論することを始ることは最好む所なりといへども其筆を用るとも其殺伐の氣味あることを含めるは又驚くべしとす其ドクトルマクゴウアンに反せる説に云日本の形勢を悉さず妄りに如斯説をなす若其人日本にあらば日本の少年勇壮の輩皆兵器を携へて是を撃んと計るべしといへり」

こうしてみると、「此人は上海にては有名のよし。既に香港新聞にも日本人「恪」の名を揚げたりといふ」という川路の、上海新聞の征韓論の記事に止まらない谷戸の言論活動の活発さを、史料の発掘によって証す必要が痛感される。

「返報」してまもなく谷戸は、上海を発って香港に向かう。高橋怡之介の『上海日記』慶応三年三月二十二日、「八戸順叔今暁香港江行」とある。

(8) 慶応三年九月 ― 帰国

(5)で見たように、帰国が順調に実現することなどありえないことを最もよく知っていたのは幕臣谷戸喜三郎である。「重き御沙汰には相成間敷」なる言をそのまま信じられないまま帰国を思い止まったもようで、この件が再び史料中に出るのは1年近く経った慶応三年(丁卯)五月二十四日付け「亜国公使并ウエンリートより御国人喜三郎歸国の儀に付申立候儀に付相伺候書付」なる文書である。ヴァンリードは、その間喜三郎の無罪、帰国のために奔走したものの、うまくいかず、荏苒一年近くの時が流れた。

業を煮やしたヴァンリードはアメリカ在日公使に訴える。公使から外国奉行、石野筑前守へ谷戸の無罪、帰国を要請する申し立てがなされ、外国奉行七名の評議の結果、「聞届」すなわち受諾するべく老中に伺いを立てた。承認の回答が御書取の形式で出された。幕府は、同七月二十六日、外国事務総裁小笠原壱岐守名で「亜米利加合衆国ミニストルレレシデント　エキセルレンシー　アルビワンソルケンボルク」(日本駐箚弁理公使　R. B. Van Valkengburgh―川崎晴朗『幕末の外交官・領事官』)宛に「喜三郎罪科赦免いたし歸国可為致旨其筋へ下命いたし候」との書簡を発する。(外国事務総裁は、安政三年老中堀田正陸に命じられた外国御用取扱を引き継ぐもので、徳川慶喜の幕政改革の一環として設置された、老中、老中格が兼務する役職であり、小笠原壱岐守長行はその初代である。)

こうして谷戸喜三郎が二年半ぶりに祖国の地を踏んだのは、慶応三年九月八日であった。神奈川奉行から外国奉行宛の九月十二日付文書中、「ウエンリート小遣喜三郎儀私に海外へ連行候儀の處英国商船ハヤマロへ便船去る八日帰港いたし候旨ウエンリート届出候」という次第である。

ところで、外国奉行は帰国後の谷戸の「彼國滞留中之所行等巨細

御糺」を神奈川奉行に命じているが、その記録は残されていない。『横浜もののはじめ考』（横浜開港資料館編・発行、1988）には、「慶応元年三月には、ヴァン・リードが通訳の八戸喜三郎を、密航のかたちで出国させ、アメリカへ同行した。翌年六月帰国するが、この間に禁制が解かれていたこともあって、不問に付されている。」とあるが、「翌年六月」に帰国したのも、「不問に付され」たのもヴァン・リードだけで、喜三郎がそうであったかはなお疑問というべきである。

Ⅲ　誤認される谷戸喜三郎

知られざる人物である谷戸は、過去の先行研究中において無視されるか、不詳とされている例が多い。取りあげてもいい『海を越えた日本人名事典』でも当然のごとく無視され、はなはだ不審と言うほかない。

沖田の前掲論文のほか、荒野泰典氏の『近世東アジアと日本』は、「八戸順叔事件」なる見出しで短い記事があるものの「八戸順叔（不詳）」とされている。

杉浦正『岸田吟香―資料から見たその一生』は、吟香研究中屈指のものだが、上海時代の『呉淞日記』を精細に取りあげているにも拘わらず、日記に頻出する「弘光」、すなわち谷戸への言及は皆無である。

不詳、また謎の人物とみなすのは『ウィキペディア』（前掲「八戸事件」）も同様である。「八戸順叔」と「八戸喜三郎」を別人として扱い、前者について「当時香港在住の日本人に八戸順叔という人物がいたという記録は存在していない。また日本側の同時代の諸史料にも全く記載がなく、姓名の正確な読み方すら不明である。慶応三年二月八日（1867年3月13日）、幕府から上海へ派遣された調査団の名倉予何人らが、当時上海に在留していた八戸順叔に接触したというが、詳細は不明である。」とする。

さらに、古田亮『高橋由一―日本洋画の父』（中公新書、2012）は、高橋怡之介一行のために上海のホテルを世話したくだりで、谷戸を「吟香の知る別の日本人」とする。

一方、誤認は、先に引用した、川路太郎の『英航日録』、慶応二年十月晦日の「日本人一名に遇然會遇しけり。此人は同船の亜人（米）シェンリート（ママ）より話を聞ける人なり。其身分は元旗本の次男某にて…」の「日本人」谷戸喜三郎を岸田吟香と混同するものである。

宮永孝氏の『慶応二年幕府イギリス留学生』（新人物往来社、1994）は、この出会いの場面を「偶然、一人の日本人と会う。この邦人のことはニポール号のアメリカ人シェンリート（不詳）という者から、かねて耳にはさんでいたが、…その日本人の名前は、――岸田銀次。といった」と描く（55頁）。「シェンリート（不詳）」であれば、米沢秀夫著『上海史話』で見出した「八戸弘光（名は喜三郎、字は順叔）」（66頁）よりも、著名なヘボンと関係のあった岸田

吟香と誤認するのは無理もない。また、十一月二日、一行が上海を出航するとき、見送りに来た日本人を、「岸田銀次、三郎（不詳）、田中広太郎（不詳）」と列挙されている（66頁）のはどんな資料的裏付けによるものか判然としない。『英航日録』には「先に遇いたる上海に住る日本人ら来たりて留別し頻りに故國の人を慕ふの情あり」とだけで、名前は出ない。

宮永氏は、川路の『英航日録』に見える「上海に在る日本人」を、箕作奎吾『英行日記』の先に引いた箇所に出てくる三人の日本人、岸田、喜三郎、田中廉太郎に単純に当てはめたもの、しかも「喜三郎」を「三郎」、田中廉太郎を「田中広太郎」と誤読されているのではないか、と思われる。『英行日記』の箕作の筆蹟は「廉太郎」の「廉」が「廣」と紛らわしく、「田中廉太郎」になにがしかの見当がなければ「廣」、すなわち「広太郎」と読むのも無理はない。「（不詳）」なる註がそのことをほのめかしている。

ところで、宮永孝氏には『高杉晋作の上海報告』（新人物往来社、1995）なる一書があり、「一行が上海で会った八戸喜三郎という邦人は、青森地方出身の元漂流民と考えられ、ガンジーズ号が上海にやって来る前年（慶応二年末ごろ）に来滬し、ハード・オーガスティン商会（保険業、中国名「璟記洋行」）に身を寄せていたらしい」とある。

沖田一『日本と上海』（大陸新報社、昭和十八年）に拠った記述らしいが、該書自体、「八戸」つまり青森の「喜三郎」という程度の単純な推測に過ぎず、ホノルルからの帰途、座礁し漂流したことをもって「元漂流民」と早合点しただけで、資料的な裏付けを欠くものだ。八戸喜三郎が来滬したのも慶応二年末ではなく、横浜で上陸を拒否されて上海に向かった同年六月頃である。

村上文昭『ヘボン物語―明治文化の中のヘボン像』（教文館、'03）も同様で、「同じ船に乗り合わせたヴァン・リードが話していた日本人とは、いま上海にいる岸田吟香のことだろう。書がうまく、詩文ができて……からして、同じ人物と考えてよい。」と述べる。（262頁）

『ウィキペディア』（前掲「八戸事件」）は、

「煙山専太郎『征韓論実相』（1907年）では、「*我九州の人、八戸順叔なる者（此人、曽て米国に遊びし事あり）上海にあり、日本政府、此議ありと聞き、軽率にも之を誇張して地の清国新聞に投書せしかば*（以下略）」（120頁）とあり、八戸を九州出身の人物で、幕末に一時米国に滞在し上海で新聞に投書したとしている。」

と興味深い謬説を紹介する。後者については、福永論文に拠りながら、「以上を総合すれば八戸喜三郎は、1865年に渡米、1866年に日本帰国に際して漂流、1867年に南京へ移住し、その間しばしば新聞に寄稿していた人物ということになる。」とやはり見当違いの説が記される。

また、八戸順叔の正体を浜田彦蔵（ジョセフ・ヒコ）と推測する

姜範錫の説（『征韓論政変』サイマル出版会、１９９０）を紹介し、「これは浜田が横浜で英字新聞を翻訳した『海外新聞』を発行しており、海外の新聞記事に詳しかったこと。例の記事中に中浜万次郎の名が挙がっているが、同様の渡米・滞米経験を持ち共通点が多い浜田なら言及の可能性が高いこと。また八戸（ハッコ）とヒコ、順叔（ジュンシュク）とジョセフは音が近いことなどを理由としているが、いささか牽強附会の感を免れない。」としている。

Ⅳ　終わりに―残された謎

帰国後の谷戸の事績を明らかにする史料は少ない。田保橋の紹介した「後姓を太陽寺（？）に改め、明治維新の際、上野国高崎藩の雇士となり藩制改革に参与し、後東京府及び地方の属官に任ぜられた」のうち、「太陽寺」への改姓と東京府の属官との点では、「東京官員録」に「太陽寺順淑」の名前を見出した。東京都公文書館蔵『掌中館員録』明治七年「東京府」の項に「九等出仕　太陽寺順淑」、同八年には「権大属　太陽寺順淑」と出る。

官位の制は、おおむね長官（卿）をトップに十五等出仕まであり、九等出仕とその一等上位の権大属は中堅クラスというところである。判明するのはこれだけで、谷戸（太陽寺）がいつからいつまで東京府に在職したのか、官員録自体が揃わず不明である。（明治12年の『改正官員録』には見えず、明治11年以前に致仕したもようである）

太陽寺なる姓については、川越藩秋元家の家臣に太陽寺盛胤なる人物がいる。また、埼玉の秩父に同名の禅宗寺院がある。これらと谷戸が関係しているのか否かもわからない。そもそも何ゆえに改姓したのか、疑わしい。

何より疑わしいのが渡欧をめぐる謎である。「東京府の属官」に「太陽寺順淑」の名が見えることは、「旧幕府遺老」たちの記憶が相応に正確であることを意味しようからなおのこと、谷戸がアメリカのみならずヨーロッパまで渡ったのではないかと、その裏づけ史料の探索への意欲がかき立てられる。

渡欧を示唆するのは「旧幕府遺老」だけでない。陳捷の前掲論文が紹介する王韜の『甕牖余談』（１８７５刊）中「日本宏光」、また『牖園文録外編』の「送日本八戸宏光遊金陵序」に「曾往英京倫敦…又嘗遊金山」とある。

「上海にて面会致し候日本人八戸順蔵と云へる人此頃フランスに滞在せるよしにて彼より上海の新聞紙並に書状を差越す。其新聞紙中には日本を賞し且つ恐れたる様にて英吉利留学生の事又は日本にて朝鮮を討つ等の事を記せり」

前稿でもふれた、川路太郎の『英航日録』、慶応三年正月十四日の記事である。「八戸順蔵」とは「八戸順叔」、「上海の新聞紙」とは、田保橋論文のいう慶応二年十二月十二日広東発行の「中外新聞」、そして掲載記事の内容が征韓論だとすれば、川路のこの記事は相当に奇妙である。上海で懐中より取り出し、川路に見せた当の新聞を、

二ヶ月余の後、フランスからわざわざ川路に送ったことになるからである。慶応三年正月十四日頃にフランスに滞在しているというのは、さらに奇妙である。前稿ではこの点について、

「仔細に検証してみれば、不可能な事態であることがすぐに判る。八丈島漂民、長戸路たちと香港のオーガスティン・ハード商会で出会ったのが慶応二年十二月朔日、上海に到着した高橋由一を訪ねたのが翌慶応三年一月十七日、その間の約五十日足らずで香港、フランス、上海と経巡ることは、超自然的霊力を備えた「異人」とてよくしうるものではない。（試みに、マルセーユ経由でロンドンに向かった浅津冨之助の、香港からパリまでの所要日数を割り出せば、正味三十二、三日、寄港地での滞在日数を加えれば、実際は四十二日かかっている。）」

と書いた。こんな計算をするまでもなく、本稿で見たように、慶応三年正月に香港から上海に戻り、十五日には高橋らの上海使節団のホテルの手配に奔走している。前稿で断じたように、川路の錯誤であることは間違いない。

慶応元年三月（1865年4月）から慶応三年九月八日（1867年10月5日）まで2年有半に及ぶ谷戸の海外行の期間のうち、渡欧の可能性が最も高いのは、慶応元年（1865年）の秋にアメリカ東部のレディング、ニューヨークを歴訪して以降、翌1866年1月サンフランシスコを出発するまでの三ヶ月である。ニューヨークから足を伸ばして、大西洋航路をとれば充分往復でき、サンフランシスコに戻るに三ヶ月は余裕の日数といえる。しかしながら、仮に谷戸が渡欧したとすれば、そのことが谷戸自らの口から語られないはずはない。何らかの記録が残されていないのはきわめて不自然である。したがって、この可能性はほとんどないと思われる。

岸田吟香が上海から帰国し、横浜に居住した時期の日記「はまつと」慶応三年九月十五日に次の記事がある。

「こないだ八戸順叔も支那からかへつて、しばらく逗留して、また支那へいく。」

川路の錯誤にミスリードされ、谷戸の渡欧が海外行の間だと決めつけてはいなかったろうか。谷戸は何のために「また支那へい」ったのか。上海から、今度は欧州を目ざさなかったか、シンガポール、ペナン、セイロン、アデン、紅海を抜けてスエズ、カイロ、アレクサンドリアから地中海に乗り出し、マルセーユへ、そしてパリ、あるいはジブラルタルを回ってササンプトン、ロンドンへ、川路たちが欧州を目ざしたように――。

帰国後の谷戸は、自らを韜晦することに服役した感がある。熱烈な佐幕派国士の矜持は維新後の状況に沈黙を以って対峙した趣がある。すれば、渡欧がまことであったにせよ、幻であったにせよ、記録は残されることはない。谷戸という人物は再び歴史の闇に退くほかはない。

＊本稿で「谷戸喜三郎」（読みは、ヤトキサブロウ）の表記をとった理由については、彼の出自を考証し、本表記が最も妥当とした前稿を参照されたい。

＊参照した文献は逐一本文中に示した。

〈参考〉谷戸順叔の足跡

＊天保十一年（西暦1840年）生？

万延元年前後

森村市左衛門、横浜のヴァンリードの商館を訪ね、「其内通弁喜三郎と云ふ人にあって、米国人「ベンリウト」といふ人に、初めてあいました」

元治元年（1864）

＊文久4年2月20日（1864年3月27日）改元

8月　ヴァンリードとともに馬関戦争従軍取材？

慶応元年「乙丑」（1865）

＊元治2年4月7日（1865年5月1日）改元

3月　広州から帰国？

4月　サンフランシスコへ（上海経由）

秋　米国東部歴訪（第17代大統領ジョンソン 59歳に拝謁）

9月　レディング

慶応2年「丙寅」（1866）

1月　サンフランシスコ出発

3月1日　ホノルル（"The Friend"）

5月　香港

6月　横浜着（上陸ゆるされず、上海へ戻る）

＊10月　ヘボン、吟香上海へ

＊10月26日（1866・12・2）英国留学生横浜出帆

10月31日（1866・12・7）上海（新聞へ寄稿？）

12月1日（1867・1・6）香港（長戸路収蔵と面会）

12月6日（1867・1・11）香港

（12月中）征韓記事掲載

慶応3年「丁卯」（1867）

1月10日（1867・2・14）上海

＊1月11日（1867・2・15）徳川昭武パリ万博へ出発

1月15日（1867・2・19）上海着

＊2月27日（1867・4・1―11・3）パリ万博開催

3月22日（1867・4・26）香港

4月1日（1867・5・4）上海

5月　上海

＊6月6日（1867・7・7）ロシア皇帝暗殺未遂事件

9月8日（1867・10・5）帰国

明治7年―明治8年　東京府出仕（大陽寺順叔）